

【 論文 】

哲学の通俗化とは何か

寅野遼

要旨:

本稿では井上円了による「哲学の通俗化」について考察する。円了自身、自らの哲学上の使命は哲学の通俗化にあるとしている。円了は哲学を民衆に広めるために、哲学館を開設し、自らの足で日本全国を歴遊し、民衆に哲学を語った。このような円了的活動には、どのような目的や意図があり、どのような方法でそれを語ったのであろうか。これらについて、円了的著作である『哲学早わかり』や『奮闘哲学』を概観することにより、円了による哲学の通俗化の内在的な問題点に答える。

キーワード：井上円了・東洋大学・哲学の通俗化・実践哲学

●序文

井上円了（1858-1919、以下では円了と表記）は実に様々な分野で活躍した人物であり、その総合的な評価は難しい。哲学者・教育者・仏教法・出版者・実業家など、我々の光の当て方によって様々な姿を見せる。しかしながら、その中でも当時耳馴染みの薄かった「哲学」を教育するために哲学館（現在の東洋大学）を設立するなど、早い段階で日本に哲学を広めることに努めた人物としてしばしば紹介される。つま

り、様々な見方ができる円了の業績の中でも、哲学を広めたことは特筆されるべきことと言えるだろう。

これらの評価はもちろん故なきことではない。明治哲学の牽引者の1人である井上哲次郎は、「明治哲学の回顧」と題する小論の中で、井上円了の業績をその学説の特色ではなく「大いに哲学というものをポピュラーライズして、世人をして哲学ということに大いに注意を惹かしむるよう努力したことにある」と評価する¹。また、円了自身も最晩年に発表された「哲学上における余の使命」において、自らの使命を「一、哲学を通俗化すること」および「二、哲学を実行化すること」と表明している²。ここでいう通俗化について、円了自身は哲学館を中心とする教育と著作活動、さらには全国を歴遊して行った哲学の通俗講話を挙げている。

本稿では円了の多岐にわたる業績の中で、この「哲学の通俗化」について考察したい。注目するのはその意図と方法である。円了はいかなる理由でもって哲学を通俗化しようと志し、いかなる仕方で民衆に語ったのであろうか。もちろん、これには円了や哲学館の活動を広く見る必要があるであろうが、本稿では円了の著作を概観することによってこれに答え、円了による哲学の通俗化の内在的な問題を指摘したい。

●「学問の中央政府」としての哲学

哲学の通俗化に対する円了の関心は、帝国大学（現在の東京大学）卒業後の進路決定にもうかがうことが出来る。帝国大学で哲学を修めた円了は、かつての恩師である石黒忠恵の推薦によって官僚への道が開かれたが、自らこれを辞退した。また、学費を捻出した東本願寺で働く道もあったが、やはりこれも辞退した。円了が志したのはあくまで民間の教育者なのであった。こうして、様々な人々の助けもあって哲学館は1887年に設立された。

哲学館設立について述べられた「哲学館開設の旨趣」には、若き円了の哲学に対する思いをはっきりと読み取ることができる。円了は哲学を「学問の中央政府」と喩えてその重要性を強調する。今日、「諸学の基礎は哲学にあり」という形で伝えられる円了の哲学への思いは、若き時代から一貫していると見て良いだろう。さて、我々にとってここで特筆すべきことは、哲学館の教育対象である。当時、哲学が教えられていたのは帝国大学のみであり、哲学書の邦訳も決して多くなく、また質も高く

なかった。これでは「学問の中央政府」である哲学が、教育される機会が大きく制限されてしまう。だからこそ、「晩学をもって速成を求むる者、貧困にして資力に乏しき者、洋語に通ぜずして原書を解せざる者（25:750）³」に対して哲学を教授する学校を建てるといふ。そして、「おもうにその異日に企望するゆえんのもの、果たしてよく成功に至らば、社会に益し国家を利し、またいづくんぞその世運開進の一大補助とならざるを知らんや（25:751）」と述べ、哲学館での哲学教育が社会や国家に大いに重要であることを強調するのである。

なお、ここで円了がそれまでの主流だった東洋哲学ではなく西洋哲学に注目する理由は、哲学館設立と同時期に出版された『哲学要領』（1886年）からもうかがうことができる。円了は、基本的に西洋・東洋両者の哲学説に多くの類似点を見出している。にもかかわらず、「東洋の諸学は西洋学の詳密にしてかつ完全なるにしかず（1:94）」と、東洋哲学の欠点を認める。円了は具体的に「孔孟学」・「老荘学」・「仏教」の名を挙げ、それらが「高妙幽玄」であることを認める。しかしながら、ここで挙げた諸学説は、それぞれが理論か実際かのどちらかに偏り、両者の関係を結合調和するものがないとする（1:95）。この偏りこそが東洋哲学の欠点であると彼は言う。これはもちろん、先に見た「学問の中央政府」という哲学の位置づけとも対応している。理論と実践を偏らずに兼ね備えた学問、あるいは両者を結びつける学問、これこそ円了が西洋哲学に見出した可能性であった。

哲学館設立の時期においても、既に円了の哲学の通俗化への思いは確立していると言えよう。理論と実践を結ぶ学問としての哲学、これを学ぶ機会を民衆に開くためにこそ、哲学館は設立されたのである。

●『哲学早わかり』に見る哲学の通俗化

しかし、円了の哲学の通俗化への思いは、哲学館の設立にとどまることはなかった。よく知られているように、円了は哲学館の拡張や維持のために、全国を歴遊して寄付を募ったのである。後に「百姓的学者」を自称する円了らしく、自らの足で全国各地を回り、民衆に対して講演や揮毫をして寄付を募ったのである。

ところが、「哲学者」と称して全国を回った円了を待ち受けていたのは、民衆の哲学に対する強烈な偏見であった。このような偏見に対して書かれたのが『通俗講談

言文一致 哲学早わかり』(1899 年)である。「序言」によれば、この著作は円了が全国を歴遊した際に「一夕の茶話として口述したるもの」を筆記して出版したものであり、「通俗講談」という副題からもうかがえるように、全 12 回の哲学入門講義の体裁を取っている。その第 1 回にあたる「発端(哲学の名義)」には、円了がなぜ哲学をわかりやすく述べようとしたかが具体的なエピソードを交えて書かれている。ある地方に行った時、哲学を説く哲学者とは仙人のような風体をしていると考え、珍しいもの見たさに宿の前に門前市ができるほどだったが、平凡な姿の円了が現れると偽物ではないかと疑われたという。また、哲学を「鉄学」と勘違いし、円了を「鍛冶屋の先生」などと呼んだ者もいたという(2:27)。しかし、円了はこのような極端な誤解や偏見よりも、より根本的な哲学への誤解を問題にしたのである。

しかしそのようなる誤解はなお許してよけれども、百人中九十九人までは哲学がおもしろいにもせよ、むずかしいにもせよ、家を富まし国を強くするには更に関係なく、世間の実用に最も遠い無用の学問にして、畢竟道楽か物好きの学ぶものに過ぎぬと考えています。この点はいやしくも哲学に従事する者の決して黙過することのできない事柄なれば、必ず口を極めて弁護の労をとらなければなりません。これ余がここに通俗に対して哲学の大意を述ぶるの必要を感じたるゆえんであります(2:27)。

円了を哲学の通俗化に向かわせた動機は、おそらくここにある。すなわち、円了にとって真に払拭すべき哲学への誤解は、笑い話になるような極端な誤解ではなく、「哲学は役に立たず、道楽者が学ぶもの」というものであった。これを克服するために、円了は哲学の内容と利益をわかりやすく語ろうと試みたのである。

それではこの著作では何が語られているのか、構成を見てみたい。既に見た「発端」が全 12 回のうちの第 1 回である。次に第 2 回から第 7 回までで哲学とは何かという、いわば哲学概論を論じ、理学(ここでは science の意)やその他の学問分野との関係において、哲学の性格を明らかにしていく。続く第 8 回および第 9 回では、簡潔な哲学史が語られる。最後に、第 10 回から第 12 回において哲学にはどのような利益があるかが問題にされる。すなわち、本書は、導入・哲学概論・哲学史・哲学の利益という、大きく 4 つの点を論じていることになる。

本稿で問題にするのは、この最後の点(第 10 回から第 12 回)である。この中で

円了は、世間が哲学を無用視する理由を、哲学そのものを知らないこと、および哲学が世を益し人を利する理由を知らないこと、としている(2:54)。これまでの哲学概論や哲学史によって「哲学そのもの」を知らせることはひとまず終えた。今や問題は哲学の利益に移ることになる。円了はこの2つによって、哲学を無用視する世間の人々に答えようとするのである。

さて、円了は哲学の利益を、社会に与える利益と、人間の精神に与える利益の2つに分けて語る⁴。まず社会に与える利益は、無形のものによって現れるという。教育・宗教・政治・道徳・美術などは無形であるが、社会にとっては有益なものである。多くの人々がこの無形のものゝ効果を軽んじて、一方で有形のものを尊ぶのは、無形のものを見る目がないからに過ぎない。円了はかつてに比べて暴政が減ったのは、無形のものゝが発達した結果であると見ている(2:54)。先に見た初期の思いと同様に、文明の発達には哲学が不可欠という立場をとるのである。

一方で、人間精神に与える利益として、円了は次の4つを挙げる(2:56)。すなわち、①知力を錬磨すること・②思想を遠大にすること・③情操を高尚にすること・④人心を安定すること、である。それぞれについて簡単に言及しておこう。①はわかりやすく、要するに哲学を学ぶことで知力が錬磨されるという。これによって、実業においても先を見通す力が得られるとする。次に②は、人間は卑屈になりがちで、特に日本人は性質急速で何ごともし小さくなりがちである。そこで哲学のような学問を学び、宇宙の広さや時間の無限なることを知り、思想を遠大にするのが良いとする。そして③は、人間は情欲や酒色に陥りがちであり、これを制するためには有形の快樂だけでなく無形の快樂についても享受できるようになることが必要とされる。最後に④は、世界に起こる様々なことは理学だけでは説明しがたく、それ故に様々な迷いを生じて、恐れながら世の中を歩くことになる。哲学において究極の問題を考察することにより、安心立命の益を得ると述べる(2:57-58)。

さらに円了は結論として富国強兵や殖産興業といった、当時の日本の課題に対して、単に有形の資本だけではこれを成し遂げられないとし、無形の資本が必要であると述べる。そして、有形のものはまず無形から生じるのであるから、無形を支配する哲学の効用は明らかであると語るのである(2:60)。また個人においては、改めて精神的な快樂が強調される。哲学によって精神的な快樂を知ることにより、酒色道楽といった肉体上の快樂にとらわれにくくなるという(2:61)。

円了が『哲学早わかり』の中で語る哲学の利益とは、社会においては文明の発展

であり、個人においては精神の錬磨に帰着する。ここでは、そうした哲学の利益を享受するための具体的な方法は細かくは述べられていない。ただ、実業家に「哲学の書類を研究する（2:60）」ことや、資産家の子弟に「成長後もときどき哲学の書類をうかがう（2:61）」ことを勧めてはいる。このわずかな箇所から円了の意図を十分に読み取ることはできないが、少なくともこの時点において円了は、哲学の書に触れることを哲学に触れる方法の1つとして見ていることは察せられる。

●円了による哲学の通俗化における問題

ここまでで、円了における「哲学の通俗化」の基本的な意図と方法を概ね紹介した。円了は哲学館の開設だけでなく、全国各地を歴遊して哲学を語った。その内容は各地の事情によってそれぞれ機転を利かせたであろうが、哲学については概ね『哲学早わかり』に書かれたような仕方で語ったのであろう。哲学という耳慣れぬ学問を理解させるために、わかりやすく日常的な口語表現で、哲学の概要と利益を語っているのが特徴である。

さて、円了自身は1906年の哲学館の退隠をもって、哲学の普及という目的を達成したとしている。しかしながら、円了の全国歴遊に対する評価は、必ずしも高くはない。先に引用した井上哲次郎は、同箇所でも円了の全国への歴遊を「その効果の空しからざりしは言う迄もない」として、一定の評価を与えつつも、その真意が哲学の普及よりも「哲学を借りて仏教を復活する」ことにあると指摘している。また、別な証言によれば、揮毫による寄付を募ったり、時にはそれを高額で売ったりするので、周囲から守銭奴のようにも見られたことすらあったという⁵。

そして何より、現代の我々にとっても、哲学の通俗化がどの程度なしとげられたかについては疑問が残る。確かに、現在の日本において哲学はほぼ全ての大学で講じられ、書店には哲学に関する様々な書物が並び、哲学の言葉の意味それ自体を知らない者はほとんどいない。それらを通俗化と呼ぶならば、一定の成功を収めているといえよう。だが一方で、円了が根本的な哲学に対する誤解とした、「哲学は役に立たず、道楽者が学ぶもの」というあの誤解は、未だに根強く残っているのではないだろうか。とすれば、円了は通俗化を試みたものの、根本的な誤解が残されてしまったことになる。今や我々は、円了による哲学の通俗化の問題について語らなく

てはならない。

もちろん、円了が行った哲学の通俗化と現代の我々を取り巻く哲学の間には、時間空間ともに大きな隔りがある。それ故、これを正しく理解しようとするならば、円了以外の様々な哲学者の活動にも注目する必要があるし、円了に限るにしても、著作だけでなく、実業上の問題も指摘しなければならないかもしれない。しかし、今回はあくまでも円了の著作から、哲学の通俗化を考える上でいかなる問題点があるかを考察したい。

まずは、哲学の利益の語り方が抽象的で難解であることであろう。利益を説く場合は、それが実際にどのような場面で有効か、具体的に語ってこそ説得力を持つ。哲学に利益があることは理解されたかもしれないが、具体的にどのようにすればその利益を得られるのかについては、必ずしも明らかではないだろう。前節の最後で指摘したように、哲学書に触れるといったことはもちろんあつただろうが、同箇所でも円了自身が言うように、それは実業家や資産家といった人々に限られるのであろう。もちろん、そのような状況だったからこそ、円了は全国を歴遊して、わかりやすく哲学を語ったのであるが。

しかし、第二の問題点はまさに、その講話およびそれを講述筆記して出版するという方法にある。すなわち、口語で語ることに問題である。口語での語りはまさに活きた言葉であり、複雑な事柄も比較的理解されやすくなると共に、それを聞く人を大いに啓発するものである。円了が当時多くの人から愛され、聴衆を集めたのは、円了の人的魅力はもちろんのこと、見事な弁舌の腕前があつたからであることは察せられる。しかしまた、口語の弱さは繰り返しの思考の吟味には耐えがたいことである。円了の講演においても、一度や二度の講話で哲学を理解することはできなかったであろう。さらに、その講演が著作となれば、口語の持っていた熱量は抜け落ち、内容や理論のみが残る。この時、哲学の利益を得るための具体的な場面が考察されていないことは、やはり問題として残るのではないだろうか。

だが、これについては次のような反論がなされるかもしれない。すなわち、哲学を活かす場面への言及がないというが、円了はまさに哲学を実践することを心がけていたのであり、実践を重視した哲学者ではないか、と。確かに、円了は実践を重視した。したがって、円了の説く哲学の実践の問題を解明することは、通俗化における問題を明らかにすることにも寄与するであろう。我々は次節において、円了晩年の書である『奮闘哲学』を読むことによってこれを考察したい。

●『奮闘哲学』に見る円了の実践

『奮闘哲学』（1917年）は円了の死の2年前出版された、円了最晩年の書である。序文によれば、これもまた哲学堂における講話を講述筆記したものを基本として出版されている。この著作において、円了が一貫して批判するのは「貴族的学者」である。すなわち、高尚な思想を掲げながら無益な空論を戦わせ、民衆に向けて語らない、そのような学者である。これに対して円了は自らを「百姓的学者」と称して、地方を巡り世道人心を維持することに努めてきたと誇る（2:210-214）。

だからこそ、ひたすら読書に明け暮れ、実用実行を考えないことへの戒めとして、「みだりに死書を読み、いたずらに死学を修むる風を改めて、活書を読み、活学を修むるようにしたい（2:219）」と述べる。それでは、ここでいう死書や活書とは何か。円了は必ずしも明白な形では明らかにしていない。しかしながら、「筆に染め紙に印したる書物のごときは死物である。故に活学を修めんとするものは、この死書を捨てて活書を読むようにしたい（2:222）」や「天も地も人もわが家の活書なり、死書を読むより活書こそ読め（2:223）」などの言葉から、紙に書かれて陳腐化した書物を読むより、天地人に実際に触れて学び、行動に移すことの重要さを説く言葉であることはわかる。理論と実践という区別を置くならば、円了は明確に実践を重視していることが明らかである。

これを円了自身は「向上門」と「向下門」という言葉で語っている。

哲学は物心相對の境遇より絶対の真際に論及する学とするは、哲学の向上門である。この向上門の外に更に絶対の域より相對界へ論下する一道があるが、これを仮に向下門と名付けておく。すなわち哲学の應用の方面である。（中略）もし哲学に向上のみありて向下なきときは、ただ学者が己の知欲を満たすまでの学となり、世道人心の上になんら益するところなきに至り、畢竟無用の長物たるを免れぬ。よって哲学には必ず向上向下の二門を併置しておかねばならぬ。すなわち向上門は哲学の理論に属する方面にして、向下門は實際に属する方面である。（2:231）

この区別はわかりやすく、向上向下の両方をもって哲学が完成することを示している。だが、『奮闘哲学』における円了は、向上の道については冷淡であると言わざ

るを得ない。既に見たように、読書に明け暮れる学者や学生を円了は批判していた。故に円了は「不読主義」を唱え、自らは数十年本を読んでいないという（2:222）。晩年の円了は「現今においては向上門は古来の説を反復するまでなれば、哲学の大本としては、余はその理源を究め尽くせりと思う。故に余は近來もっぱら向下の一道に全力を注ぎつつある（2:235）」と語るように、細分化していく哲学の諸学説には興味がなく、これをどうやって応用していくかに心を砕いていたように見える。そのためか、書を読み、思考を巡らすといった哲学の基礎的な学習は最低限に止まってしまう。

なるべく世道人心を裨益せんためには、向上の研究は大体を知るをもって足りとし、もっぱら向下に重きを置いて、時弊を矯正する方に力を注ぎたいものと思う。この目的を達するには書籍の研究としては一卷の哲学史か、一冊の哲学概論を熟読するをもって足ると思う。決して年々歳々、雨後の竹の子のごとくできる哲学の新著を通読するに及ばぬ。（2:250）

引用が多くなってしまったが、これらによって円了の意図は明らかである。改めて整理するならば、哲学には向上門と向下門の2つがあり、前者は絶対に至る理論的な領域、後者は絶対が相対に至る実践的な領域である。円了は向上は必要であるとしながらも、あくまでそれは大体のことを知れば十分とし、真の目的は向下にあるという。円了はこの著作の中で繰り返し「活用活動」や「奮闘」を説き、哲学を修める者に対して「風俗の改良、人心の矯正、世道の振起」といった民衆の教化に取り組むべきだと主張する（2:441）。円了をここまで実践活動に駆り立てる、当時の風潮や彼が批判した空理空論とは一体何であろうか。このことは思想的に非常に興味深い、ここでは立ち入らない。

それでは、前節で問題となった、哲学を活用する場面の問題はどうなったのであろうか。『奮闘哲学』の終盤において、哲学の直接的な応用として「哲学的宗教」が語られる。これについては冒頭で引いた「哲学上における余の使命」の後半部分に同様の内容がよりまとまった形で述べられている。1919年に書かれた本稿において、議論の前提は2年前の『奮闘哲学』と同様である。つまり、空理空論に走る学者や学生を批判しつつ、向上門については一卷の小哲学史を通読すれば十分であり、実行問題を研究すべしというものである。そして、この実行方法が「南無絶対無限尊」

の唱念であるという。円了は次のような和讃で説明している。

世の哲学を眺むるに、議論の花は開けども、いまだ一つの応用の、実を結ばぬは遺憾なり。

高嶺の月を知らずして、麓の道に迷いつつ、有無の詮議に日を送る。こは哲学の時弊なり。

人の心の渡るべき、道を示さぬ哲学は、向上ありて向下なき、不具の学と名づくるべし。

向下門の哲学は、向上門の究竟理を、実践躬行する道を、教ゆることに他ならず。

かかる真理を世の人に、示して実行せしむるは、多くの道のある中に、唱念法こそ至要なれ。

唱念法は口にただ、南無絶対無限尊、唱うるほかに何ごとも、勤め行う用はなし。⁶

こうして円了が行き着いた哲学の実行は哲学的宗教、それも仏教に倣った「南無絶対無限尊」の唱念であった。この唱念法そのものの是非については、仏教や宗教に詳しくない筆者には判断できない。しかしながら、これは我々が現在知る哲学のあり方とは非常に大きく異なるものでもあり、若き時代の円了が唱えていた「学問の中央政府」としての哲学という位置づけとも、必ずしも整合的でない。時代を見渡してみると、これらの著作が書かれた円了晩年の時期には、既に西田幾多郎の『善の研究』（1911年）や、和辻哲郎の『ニイチェ研究』（1913年）など、後の日本の哲学研究を方向付けるような著作が出始めた時期である。円了からすれば、これらの書は向上に偏ったものとして批判されるべきものなのかもしれない。しかしまた、これらの書に魅せられて哲学研究を志し、日本の哲学に貢献した者も少なくないことは事実である。

円了が最晩年にたどり着いたのは、理論的な学習を最小限に留め、実践活動を第一とし、唱念法による民衆の教化こそが哲学者の使命である、とする立場であった。繰り返すが、これ自体の是非の判断は下せない。しかし、初期の円了は西洋哲学の優れた点を「諸学説互いにその真偽を争い、その優劣を競うの勢いあり（1:107）」という点に見ていたのであった。これは単に円了が西洋を持ち上げているだけでな

く、哲学の美点を優れた慧眼で見抜いていると言わなければならない。西洋哲学は伝統的な知を継承しながらも、それぞれの学者や学派同士の対話や対決によって発展してきた。だとすれば、「不読主義」や「実用実行主義」、さらに唱念法などの奨励は、この継承や対話を妨げてしまう可能性すらあるだろう。また、円了は向上は大體のものを一度学べば十分とし、その後向下に向かうべしとしている。しかし、実際に何かを成し遂げようとするならば、理論と実践、向上と向下の間を往復しながら取り組むしかない、ということは我々の経験からして明らかである。円了による哲学の通俗化の問題点は、概ねこのような点にあると言ってよいだろう。

● 結語

以上で円了による哲学の通俗化について、主要著作から検討したことになる。改めて振り返れば、哲学館設立の時期から理論と実践の調和を重視し、それを民衆に広く伝えることで日本社会を改良しようとした、その信念は生涯変わらなかったと言えよう。そしてまた、民衆に哲学を広める方法も、学校の設立・平易な哲学入門書の執筆・全国への講演活動・哲学堂の設立など、常に民衆に向けていかに語りうるかを模索し、実行したことは明らかである。今日まで、円了と同じように平易な入門書や講演活動によって哲学を語る学者は大勢いる。だが、果たしてその中に円了ほど精力的かつ広範な活動をしたものがあるであろうか。自らの足で全国各地を周り、自らの言葉で新しい学問である哲学を語る。この情熱と行動力は、他のいかなる者とも比べるできないであろう。

しかしながら、本稿でも既に述べた通り、円了の哲学の通俗化には問題点もあった。彼自身が払拭しようとした「哲学は役に立たず、道楽者が学ぶもの」という誤解は、未だ根強く残っているのではないだろうか。そして前に述べたように、円了と同じような仕方で哲学を通俗化しようと試みるものはたくさんいる。だが、円了が哲学の通俗化を試み、民衆でも実行しやすい方法を追求した結果、円了が若い頃に持っていた哲学と大きな食い違いが生じたことは、本稿でも指摘したとおりである。おそらく、哲学についてわかりやすく語ったり、書いたりしても、一部の人間を啓発することはあっても、それがきっかけとなって哲学が通俗化していくことはないだろう。本稿だけでは到底不十分だが、このことは哲学の通俗化に内在する問題で

あるように思われる。それよりはむしろ、円了初期の著作である『哲学一夕話』（1886年）を読んで西田幾多郎が哲学を志したように⁷、自らの哲学的立場を真摯に示すことが次の世代に哲学を伝えることに繋がるのかもしれない。

それでは「哲学の通俗化とは何か」という題目に答えるとすれば、どうなるか。この難題に一言で答えることは容易ではない。無知を承知で言えば、「哲学の通俗化」とは共通の知の基盤を作り、それを広げ、引き継いでいくことではないだろうか。先に触れたように、円了が西洋哲学に見いだした長所は、単に先人の思想を引き継いでいくだけではなく、それを批判したり、それに追加することで新たな立場を確立する、このような知の営みであった。であるならば、哲学の通俗化として取り組むべきは、哲学の知識をわかりやすく伝えることや、それを実践にどう繋げるかを性急に探ることではない。むしろ、人々が自分自身の問題や社会の問題に向き合う時、慎重に判断し議論できる場を作っていくことではないだろうか。そのような意味において、円了が遺した東洋大学は、今もなお、哲学の通俗化への使命を帯び、それを実現するために重要な役割を果たしうるであろう。

最後に、本稿では明らかにすることができなかつたいくつかの課題について、触れておきたい。第一に、晩年の円了が批判していた「貴族的学者」とはどのような人物あるいは学派であり、当時の思想界の位置関係はどうであったのか、という問題である。第二の課題は、円了が哲学の通俗化を試みた外在的、あるいは社会的な要因である。本稿でも円了が富国強兵や殖産興業など、当時の社会的課題に答えようとしたことを示したが、晩年の実践においては何が課題となっていたのだろうか。前の課題とも重複するが、円了が実践や道徳を重んじた背景にはいかなる社会状況があったのか。これは円了の国家観や社会観を考える上でも興味深い。第三の課題は、本稿の中でも紹介したように、井上哲次郎が円了の活動を「哲学を借りて仏教を復活する」ことが目的と評したが、まさにこれである。すなわち、円了の根本的な関心は哲学にあったのか、仏教あるいは宗教にあったのか、という問題である。このことは円了の著作全体の理解とも関わるだろう。いずれも日本思想史に関わる大きな課題であるが、これらに答えることができるなら、多様な円了の姿にまた新たなものが加わり、またそれはより明確に映るであろう。

参考文献

- 『井上円了選集』（東洋大学、1987年）
井上哲次郎「明治哲学界の回顧」（『岩波講座 哲学 [関係項目]』岩波書店、1932年）
井上円了著、竹村牧男監修『妖怪玄談』大東出版社、2011年
三浦節夫「生涯学習のパイオニアとしての井上円了」（『井上円了センター年報』第8号、1999年）
白井雅人「井上円了『哲学一夕話』と西田幾多郎」（『国際哲学研究』第1号、2012年）

注

- ¹ 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」（『岩波講座 哲学 [関係項目]』岩波書店、1932年）、p.68 なお、旧字体や仮名遣いは現代風に改めた。
- ² 「哲学上における余の使命」（井上円了著、竹村牧男監修『妖怪玄談』大東出版社、2011年）、p.282
- ³ 本稿における『井上円了選集』（東洋大学、1987年）からの引用は、（巻数:頁数）で文中に示す。すなわち、（25:250）は『井上円了選集』第25巻250ページを示す。
- ⁴ なお『哲学早わかり』の7年前、1892年の哲学館講義録に収められた『純粹哲学講義』における「哲学総論 第5段 哲学の応用および実益」においてもほぼ同様の説明が見られる（7:61-67）。
- ⁵ 三浦節夫「生涯学習のパイオニアとしての井上円了」（『井上円了センター年報』第8号、1999年）、p.94
- ⁶ 「哲学上における余の使命」（前掲書 p.285） 円了は唱念法による哲学の実行化を25首の和讃で表しているが、ここではそのうち最初の2首のみを引用した。
- ⁷ これについては、白井雅人「井上円了『哲学一夕話』と西田幾多郎」（『国際哲学研究』第1号、2012年）が詳しい。

（寅野遼・東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程）